

13. びまん性大腸潰瘍を認めた1剖検例

野瀬晴彦, 田口忠男, 岩間章介
石原運雄, 加藤繁雄 (千葉労災)
今野暁男 (同・病理)

患者は62歳女性。主訴は頻回の粘血便。大腸内視鏡では、S状結腸より口側に打ち抜き状の円形潰瘍が全周性に多発し急性潰瘍病変を示したが、生検を含め特異的所見はなかった。患者は盲腸部の多発穿孔により死亡。剖検では、全種腸に局限した潰瘍が全周性に連続し、一部で線状に認められた。組織像は全層性の炎症のみで、肉芽腫、アミロイド沈着、アメーバ虫体は認められなかった。鑑別不能であった大腸炎の一剖検例を報告した。

14. 気管支喘息治療の研究

池上晴介 (池上内科医院)

気管支の反応性を高めていて、可逆的にくり返し起す喘息発作の原因に、再燃を起し易い結核性の気管支小病巣を考え臨床的に追求した。

10歳以下の患児について、ツ反応は176例中72%陽性、(±)(-)及び不明者66例は確認用で91%陽性であった。R.F.P.以前の治療239例中2年以上継続治療群では90%以上の治癒成績であり、早期継続治療群に治癒率が高い。

R.F.P.併用治療8例中4例は重積状態で、1例は肋膜炎併発で来院したが、治療開始後20日～1月で治癒し治療終了1～2年後も健康である。

菌の証明は困難であるが、喘息と結核は深い関係にあると考えられ、一般手当もそれに準じた方法が大切であると考えられる。

15. 急性胆嚢炎の臨床経過と超音波像の検討

北 和彦, 江畑稔樹, 中村広志
浅田 学 (旭中央)

過去4年間の急性胆嚢炎57例中、保存的治療例34例、胆嚢ドレーン施行例16例、緊急手術施行例7例であった。ドレーン施行例は高齢者や合併症を有した例、保存的治療で臨床症状が増悪した例、US上胆嚢周囲にabscessやfluidを認めた例であった。診断時5mm以上の胆嚢壁肥厚例の半数はドレーンや緊急手術を必要とした。軽快後のUS像は正常、緊満不良、水腫、萎縮の4型がみられ、5mm以上の壁肥厚例は全例が萎縮型となった。

16. 胆嚢癌を合併した先天性総胆管拡張症の1例

廣田勝太郎 (水戸済生会総合)

症例は61歳女性。生来健康であったが急性胆嚢炎症状で入院。エコー、ERCPで膵、胆管合流異常を伴う先天性総胆管拡張症に胆嚢癌が合併したものと判明した。術中採取した胆管内胆汁及び胆嚢内胆汁のアミラーゼ活性はそれぞれ327U/l, 17930U/lであった。胆嚢は慢性胆嚢炎の所見が認められたが、拡張した胆管壁は正常であった。この症例では胆嚢管も太く、胆嚢も大きかったため、逆流した膵液は胆嚢に濃縮されたものと考えられる。

17. 画像診断上胆嚢癌と鑑別困難であった興味ある1例

三上 繁, 三木 亮, 唐沢英偉
五月女直樹, 杉浦信之, 上野高次
(国立横浜東)
渡部寿永 (国際親善病院)
近藤福雄 (千大)

症例は60歳女性。昭和36年よりSLEにて加療中。昭和62年5月右上腹部痛、発熱で精査をうけ、US、CTで胆嚢底部の腫瘍像(9カ月前のUSでは胆嚢壁の限局的肥厚様所見のみ)、血管造影で濃染像を呈し、胆嚢癌が疑われ胆嚢摘出及び肝床切除術が施行された。胆嚢底部に潰瘍形成を認め、潰瘍底に固着した黒色のビリルビンカルシウム塊を認め、病理組織学的には慢性胆嚢炎と診断された。画像診断上特に興味ある症例と思われた。

18. 内視鏡的に治療し得た Sump 症候群の3例

渡辺義郎, 渡辺 浄 (小田原市立)
福田 淳, 穂坂義隆 (同・外科)

症例1は41歳女性。胆管空腸吻合術後、胆管胆石を再発。EPTを施行し截石した。症例2は61歳女性。胆管十二指腸吻合術、空置的胃切除術を施行後、胆管炎を繰り返していた。PTCS下に截石し、乳頭切開術を施行した。症例3は68歳男性。胆管十二指腸吻合術、乳頭形成術の既往あり、胆管炎を合併したが、経皮的、経口的approachの併用により截石に成功した。以上Sump症候群3例に対して内視鏡的に治療し得たので報告した。